

研修を受けて、知らず知らず偏見を身につけていました

「ゆきさんへの手紙」

藤田和子さんのお話を聞いて、自分が認知症となっても「藤田さんのような生き方をするといいんだなあ」って少し前向きな気持ちになりました。

看護師としていろいろな研修を受けるとかえって、自分でも知らないうちに偏見を身につけている、そのことにも今回の講義を受けて気づきました。がん治療は発展的で、健診による早期発見が可能となり、外来で仕事をしながら化学治療を受ける方が多くなってきています。病名告知も一般的になり疼痛コントロールができていれば万が一、人生における最終段階が来ても、死への準備と自宅で穏やかな人生の幕引きが夢じゃない時代となってきました。

一方、私の認知症へのイメージは、4人に1人、3人に1人とがんに並んで好発するにもかかわらず、自分のことが自分でわからなくなってくる、家族のこともわからなくなってくる病気…。最後は施設で寝たきりとなり、内蔵が丈夫で生きた期間が長くなっても、人として生き活きと生きることはできないと偏見を持っていました。

しかし、今回の藤田さんの話を聞いて誰かの支援があればなんとかなる、足が使えないと杖や車いすを活用するように、認知症になり「忘れる」ことが出てきても、手となり足となり支援してくれる人や物を手に入れる事ができては、多少の不自由さはあっても私らしくできるんだなあって思うことができました。

藤田さんが今回の講演のために、娘さんの支援を受けて赤坂キャンパスまでおいでになったように、私もできないと思った時は娘にSOSをして助けてもらっています…パソコンの設定ややこしい手続きが必要な時は今でも娘におまかせパックで依頼をしています。もしも認知症になったら、「今以上に」もっとひどく疲れやすかったりする、時間感覚がなくなったり、新しい事や夜に弱くなるかもしれないけど、その時は「今以上に」周囲に支援をお願いすればいいと思いました。

ただ、「人に素直に依頼できる心」と、私のお助けSOSを受け取る「周囲の環境」を整えなければいけないなと思いました。

その「周囲の環境」で役に立つのが藤田さんたちの活動です。さまざま方と共に、藤田さんが行ってくれているおかげで、「認知症とは」どういうことか、どうやってパートナーシップで暮らしていけばいいのかと記されているので、私は娘に「お母さんが認知症になったら、藤田さんたちの本を読んで認識を深めてね」と頼もうと思います。多かれ少なかれ私が認知症になったら、迷惑を被る娘に少しでもお助けマンとなるモノを提示して、一緒に人生を歩んでほしいなと思いました。

「藤田和子さんへの礼状」

藤田和子さん、貴重なご講演、ありがとうございました。藤田さんのお話を聞いてなんとなく安心したというのが本音です。若年性かどうかは横において、認知症には誰もがかなりの確率でなることが予想されます。

「癌と認知症、なるならどっちがいいですか？」と緩和ケアの研修で講師から聞かれたことがあり、癌は症状コントロールさえできていれば、最期まで人として尊厳を持って生きられることができると聞き、認知症に対する偏見が少なからず、ありました。

しかし、藤田さんの話を聞き、「うまく楽しめばいい、支援者と伴走して生きればいいんだなあ」って考え直すことができました。これからも、将来同じ病気になるかもしれない私たちのために、全国各地でご活躍下さい。